編集後記

東アジア世界史研究センターの研究プロジェクト「古代東アジア世界史と留学生」は、今年度で、オープン・リサーチ・センター整備事業としての5年間の活動を終えることになった。多くの成果を挙げて一つの区切りを迎えることができたことは、ご理解、ご協力いただいた多くの方々、並びにご支援くださった大学関係者のお陰である。そのご恩に感謝の気持ちを込めて、ここに『東アジア世界史研究センター年報』第6号をお届けする。

本『年報』は、最終年度となった本年度に開催された2回の公開講座の講演を中心にした構成となっている。このなかには最後となった第6回公開講座のおわりに行なった本プロジェクトの研究総括も収録した。一瞥していただければ幸いである。

本センターでは、プロジェクト開始当初から、日本から唐への留学生を基点として、さらにそれを東アジア、つまり朝鮮半島・日本列島などの地域に存在した留学生に対象を広げ、その留学生について、それぞれの地域の国家が、それぞれの社会の如何なる人物を派遣したのか、その目的は何で、実際に各地域にもたらされたものは何であったか、その交流によってそれぞれの社会はどう変化したのか、などの諸点を具体的に見つめることで、東アジア世界史を新たに構造化できないだろうかとの問題意識をもっていた。

研究を開始して間もなく、その東アジア世界史という見方そのものに有効性があるのかといった論点が次第に大きくなっていった。そのなかで、私たちは、唐を中心として各国に放射線状に伸びる線の上での往復運動（冊封体制や留学生の流れ）と考えられていた従来の東アジア世界史論に対して、留学生を出す側の間（「東夷」間）での交通を（これを担った者も留学生として）問い直すことが、新たな東アジア世界史の有効性を見出す可能性をもっているのではないかとの研究の方向性を得た。また中核（唐）・周辺（新羅）・縁辺（日本）という新たな提言も展開され、さらに今年度は、東アジア世界史論では捉えきれない諸事象を説明できるものとして、近年提起され始めた東部ユーラシア論、あるいは東部ユーラシア世界論についても検討を行なうことができた。もとよりこの問題は、このプロジェクトのみで解答が出るものではない。今後も追究しなければならない課題である。

またこのプロジェクト発足のきっかけともなった井真成墓誌研究においても、本プロジェクトは、井真成の「身分」について新たな見解も提起することができた。日本古代史研究者・中国古代史研究者間でのさらなる議論を期待したい。

まだまだ課題を多く残した本プロジェクトではあるが、この5年間で本センターが、こうした課題を検討する場としての、あるいは研究者間の研究情報交換の場としての、研究拠点として成長したことは私たちの誇りの一つとなっている。さらに古代東アジア世界内の地域間交流の具体的な研究をするに当たって、本プロジェクトがホームページ上に公開している「古代東アジア世界史年表」が完成した。このデータベースも、本センターが拠点としての役割を果たすこととともに、今後その有用性がますます大きなものになってくれることを願っている。

ともあれ、この5年間、本プロジェクトの公開講座・シンポジウムにおける講演、報告を引き

受けていただいた諸先生に、またこれらに参加し、多くの質問を寄せいただき、討論を活発なものにしていただいた皆様に、あらためて感謝したい。さらに「年表」作成をはじめ多くのプロジェクトの事業を支えてくれたＲ・Ａ諸氏に、また事務的作業を担っていただいた社会知性開発研究センターの職員の皆様に、心よりお礼を申し上げたい。

本研究プロジェクトはこれでひとまず閉じることになりますが、東アジア世界史研究センターは、今後も形を変えて研究を継続して参ります。研究拠点として研究会の開催も考えております。上に述べました「年表」もより正確さを高めるために補訂を重ねていく所存です。そのためにも『年報』「年表」に対しても、また本センターに対しましても、忌憚のないご意見・ご批判をお寄せいただければ幸いです。今後とも本学の諸事業にご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げ、事務局からのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

（飯尾秀幸）